

## 第 101 回 歴史リレー講座「修験道の起源 —中国道教の影響—」 千田 稔氏 (R5.2.19)

歴史というものは自分の身体と何らかの接点を持って初めて語ることができますし、聴く人も理解できます。例えば、正倉院のシルクロード御物を間近で見たときの感動といった身体感覚が必須です。

日本の修験道は中国の道教思想を上手に採り入れながら独自の宗教として発展してきました。ここ王寺町は修験道や道教との関わりが深く、葛城修験の始まり和歌山県加太<sup>かた</sup>から数えて最後 28 番目の場所については「明神山説」と「亀の瀬説」の二つがあるのですが決着はついていません。どちらにせよ、それぞれの場所に法華経の経筒が埋められているという伝承が残っています。修験道の聖典『役君形生記』<sup>えんくんぎょうしやうき</sup>には、「卒塔婆の峰に埋経」とあり、この峰が明神山を指すといわれますが、確証があるわけではありません。

『日本書紀』によると、聖徳太子は片岡山遊行で出逢った飢人のために墓を建てました。後日、使者が墓を訪れると中は空で衣服が棺の上に折り畳んであったため、太子は飢人<sup>しんじん</sup>を真人（仙人の最高位）だと推測します。仙人になる方法のひとつに、尸解仙<sup>しかいせん</sup>（蟬が殻から抜け出すようにして仙人になる）があります。つまり、殻は脱ぎ置かれた着物のことであり、飢人伝説は道教そのものです。舞台となった片岡山は現在の放光寺（片岡王寺跡）。これが地名「王寺」の由来です。この伝説は仏教よりもむしろ道教の色合いが濃いといえます。片岡山は現在の達磨寺と捉え、真人と達磨を同一視する考察もありますが、いずれにせよ王寺町の骨格を成しているのは道教伝承に違いありません。

さて、道教の礎は不老長生を願う「神仙思想」と、老子や荘子が唱えた「無為自然」の二つです。仙人に到達するための厳しい修行は修験道に通じます。ご存じのように、道教と山岳信仰は深い繋がりがありますが、海も例外ではありません。例えば、浦島太郎が夢見心地で過ごした龍宮城はまさに海底の神仙境です。『万葉集』や『日本書紀』にもこの話は登場します。そして、「無為自然」とはあらゆる執着を手放して軽やかに生きることです。宇宙のあり方に従い、俗世間と距離を置いて自然のままに生きることなど不可能でしょうが、他人の悪口を言わないなど、私たちが実践できることは少なくありません。

修験道は、仏教の一派である密教（天台宗・真言宗）で行われていた山中修行と、日本古来の山岳信仰が融合し、<sup>えんのおづめ</sup>役小角を祖として成立しました。ご存じのように修験道の聖地、吉野の大峯山は女人禁制。その賛否は分かれますが、古来宗教の根本として守り続けることは間違っていない。昔はそれぞれの村で十三参りといって、13 歳になった男子は大峯山に登らされたものです。男性中心の共同体を支えるため、厳しい修行を終えてようやくその一員になれるというしきたりでした。

『続日本紀』文武天皇 3 年（699）には、役小角が伊豆島に流されたとの記載があります。はじめ小角は大和の葛木山（現在の御所市あたり）に住んでおり、呪術に長けていました。流罪は小角を快く思わない弟子の韓国連<sup>からくにのむらじひろたり</sup>足が「小角は呪術で人を惑わす」との噂を流したためです。実際、小角は鬼神を思いのままに操ることができたと言われ、『日本霊異記』（平安初期）にも「金峯山と葛木に橋を渡して自由闊達に歩いた」と記されています。

江戸時代になると幕府は慶長 18 年（1613）に修験道法度を定め、修験道を真言宗系（高野山）の当山派、天台宗系（比叡山）の本山派の二つに峻別します。そして、明治元年（1868）には廃仏毀釈のもと神仏分離令が、4 年後には修験禁止令が発令されました。ここでやり玉に挙げられたのが大峯山で、すべての寺は廃寺されるか神社に改編されました。しかし、吉野の人々の尽力で金峯山寺は復興を遂げ、京都の聖護院や醍醐寺三宝院なども形を変え修験として生き永らえることとなります。

明治時代までは、宗教的な意味合いを除けば登山という概念が人々にはありませんでした。大和川を隔てた亀の瀬を見渡せる明神山は、山頂から眺望するだけでなく下から仰いでこそ存在の大きさが体感できます。歴史は書物からだけでなく体験して初めて身につくことをご納得いただけると思います。